

「魏の皇帝から邪馬台国女王に下賜された鏡」

三角縁神獸鏡

香取遺産

Vol.41



▲城山1号墳出土 吾作銘三角縁三神五獣鏡

城山1号墳から三角縁神獸鏡が出土したことは以前に触れたところですが、今回はこの鏡について紹介します。

鏡縁が突出してその断面形が三角形状になり、背面に半肉彫りの神仙や靈獸を表現した鏡を三角縁神獸鏡と呼んでいます。直径が20cmから25cmに集中し、同一の鑄型を用いて作った同範鏡が多いことも特徴です。

また、その分布は東は群馬県から西は熊本県に及んでいます。

三角縁神獸鏡には、中国三国時代の魏の年号「景初三年」や「正始元年」の銘文をもつものがあり、図像紋様からも明らかに中国で作られた鏡とそれを模倣して日本で作られた倭製鏡が識別されています。

この中国鏡には、魏志倭人伝にある景初3年(239)魏帝から邪馬台国の女王卑弥呼に下賜された「銅鏡百枚」にあたるものが含まれるとする説が有力なのですが、これまで中国で1面も発見されていないことから、すべてを倭製鏡とする主張もあります。

最近の研究によれば、中国鏡の三角縁神獸鏡は、魏・晋代に倭国向けに作られた特鑄鏡とする考え方が最も有力です。下賜用に調製したものであれば、日本では出土しなくても当然ということです。

城山1号墳出土鏡は中国鏡です。直径22・2cm。内区に複像式の三神五獣を表現し、内区外周部の銘帯には「吾作明竟」で始まる42文字を鑄出しており、古い

型式に属するものです。この鏡には同範鏡があり、兵庫県西求女塚古墳で2面、京都府椿井大塚山古墳と岐阜県可児市でそれぞれ1面が確認されています。

おそらく、これらの鏡は「銅鏡百枚」に含まれるものであり、邪馬台国の女王から直接・間接的に各地の有力首長に配布されたものと思われる。西求女塚古墳鏡や椿井大塚山古墳鏡は3世紀後半に首長の死とともに副葬されましたが、本鏡は贈与を繰り返して、300年以上も経過してから城山1号墳の被葬者の副葬品として埋納されました。

この鏡の精巧な模造品を市文化財保存館に展示しています。邪馬台国の風を少しでも感じて頂ければと思います。